# 東北土を考える会
## 大規模畑作でのスマート農業の最新技術を学ぶ

挨拶は永浦清太郎会長

▶7月19日、20日
（岩手県岩泉町）

去る7月19日（金）、20日（土）に東北土を考える会（永浦清太郎会長）が岩手県平泉町で総会・夏期研修会を開催した。会員と一般参加の生産者、企業、事務局など総勢80名近くが駆け付けた。

今夏のテーマは「畑のスマート最前線 in 平泉 ～畑作のスマート農業について、どのくらいご存知ですか？～」。初日は座学にて、帯広畜産大学の佐藤禎稔教授による講演を聞いた。スマート農業技術の基礎知識から最新動向に触れた後、大規模畑作の現場に密着したロボットトラクターの開発の裏側や、開発中のスプレイヤのブーム高さ自動制御装置が紹介された。

さらに参加者が興味を寄せたのは、情報交換会で佐藤教授が披露した中国の農業機械展示会の視察報告だ。有名ブランドの模倣品から、国を挙げて高度な技術開発に取り組んでいる中国農機業界の動向は貴重な情報提供となった。

翌2日目はアグリパーク舞川の圃場に移動して、大型トラクターと大型作業機による現地勉強会を行なった。ヤンマーアグリジャパン㈱東北支社はタブレットからの遠隔操作により無人で稼働するロボットトラクターと、緊急時には人が対応することを前提にハンドル操作等を自動で行なうオートトラクターを実演した。80～113馬力の該当機種には後付け可能。

続いて、㈱みちのくクボタはアグリロボトラクタ（有人仕様）を実演し、昨年リリースされた無人仕様に比べて、高価な安全装置を搭載しない分だけ価格が抑えられることをアピールした。油圧式オートステアを搭載したM7トラクターのほか、コンバインに装着する流量センサとGPSユニット、田植え機の可変施肥キットなど、稲・麦の食味・収量のメッシュマップ化に対応する最新技術を紹介した。

なお、研修会に先立って開催された2019年度の総会では、かねてより会員が希望していた独自の新たな会則が採択され、事務局をスガノ農機㈱東北支店に置き、役員を中心とした運営を行なっていくことを確認した。

（加藤祐子）

初日の講師、帯広畜産大学の佐藤禎稔教授

無人のヤンマーYT490＋スタブルカルチ（スガノ農機）と、それを追従する有人のYT5113A＋カットロータリ（スガノ農機）

ニコン・トリンブルの油圧式オートステアを採用したクボタM7（171馬力）＋（フロント）タイン・スパイラルローラ＋（リア）コンビソイラ・バーチカルハロー（作業機はいずれもスガノ農機）

晴天に恵まれた実演会場での集合写真

飯田勝市会長が開会挨拶

# 関東甲信越土を考える会
## 大規模米麦経営と農機カスタマイズを学ぶ視察ツアー

▶8月7日
（栃木県鹿沼市、群馬県みどり市・前橋市）

関東甲信越土を考える会（飯田勝市会長）が8月7日（水）に「北関東弾丸ツアー」を開催し、関東エリアの会員を中心に30名余りが参加した。会員同士の懇親を深めるという趣旨で企画され、㈱農業生産法人ワタナベ（栃木県鹿沼市）、本誌連載でお馴染みの㈱ロブストス、元気ファーム20（群馬県前橋市）の3カ所を訪ねた。

集合場所は、中山間地域の半径10㎞圏内で約72haの米麦生産を行なっている㈱農業生産法人ワタナベ。渡邉宏幸社長が農場の概要を説明し、事務所と農機倉庫、新しいライスセンターを見学した。100haを目標に掲げているものの、おそらくそれ以上に広がるという見込みのもと、機械・設備以外にも従業員を雇い入れ、拡張を進めている。

2軒目は、農機のカスタマイズを手がけるロブストス。全国の町工場とネットワークを組んで、廃番になった農機の修復や、農機のカスタマイズで現場のニーズに応えている。事務所も常にカスタマイズの手が加えられ、「現在進行形」を笑顔で強調する高垣達郎社長が出迎えてくれた。整理整頓が行き届いた工房と試作スペースを見学した後、会員からの依頼案件も交えて、事例を写真や動画で紹介した。

最後の3軒目は、農事組合法人元気ファーム20（関根正敏代表）。米麦二毛作地帯で、1000tの乾燥調製を担う計画で5年前に建設されたライスセンターと、飼料稲WCSや籾米サイレージに取り組むために投資した大型トラクターや土耕機、収穫機などを見学した。信頼関係の深い耕畜連携の話を興味深く聞き入っていた。

次回は、10月19日（土）に長野県野辺山でBBQを開催する予定。

（加藤祐子）

㈱農業生産法人ワタナベのライスセンターにて

㈱ロブストスの事務所で集合写真

飼料稲 WCS の収穫作業で活躍する大型作業機。
高品質の餌を生産することで信頼関係が成り立っている